

Academy

【教授対談シリーズ】

こだわりアカデミー

● 現代社会のコミュニケーションツール
「方言コスプレ」



日本大学文理学部国文学科教授

田中 ゆかり氏

Yukari Tanaka

1964年神奈川県生まれ。87年早稲田大学第一文学部日本文学専修卒業後、約3年間、読売新聞社に記者職として勤務。96年早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程修了、博士(文学)。早稲田大学文学部助手、日本学術振興会特別研究員(PD)、静岡県立大学国際関係学部専任講師などを経て、2006年から現職。専門は、日本語学(方言・社会言語学)。現代日本語社会で生ずるさまざまな「ことば」に関わる現象を足場として、社会や都市の成り立ち・行く末、そこで暮らす人々の意識や実態を研究している。著書は、『「方言コスプレ」の時代—二セ関西弁から龍馬語まで』(岩波書店)、『首都圏における言語動態の研究』(笠間書院)など。

対談記事はweb版「こだわりアカデミー」でもご覧いただけます。

こだわりアカデミー

検索

<http://athome-academy.jp/>

「方言コスプレ」とは、
方言を用いた
『ことばのコスチューム・プレー』
のことです。

関西弁の調査がきっかけで、「方言」に興味を持つようになった。

「方言コスプレ」という言葉は、これまでに聞いたことがなかったのですが、ユニークでキャッチーな言葉ですね。

先生がおつくりになったそうですが、一体どういう意味なんですか。「コスプレ」って、いわゆる「仮装」という意味ですよね？

田中 そうです。通常のコスプレは、アニメやゲームのキャラクターなどの真似をして『なりきり』ますが、「方言コスプレ」というのは、方言を交えた言葉を使うことで別の自分になりきる事です。そうすると、より相手に気持ちが伝わったり、場を和ませたりできるんです。そうした経験はありませんか？

——そういえば、私もちょっと場の

雰囲気を変えたいときなど、下手な関西弁や東北弁を使ったりすることがあります。

田中 それがまさに「ことばの仮装」なんです。その場を楽しく、和らげようという意図を持って、「方言」をコミュニケーションツールとして使っているわけです。

——面白い研究テーマだと思うのですが、このようなご研究を始めたきっかけは何だったんでしょう。

田中 2000年に、研究者グループ間で「関西弁が日本全国の大都市でどのように受け入れられているのか」というプロジェクトを立ち上げ、全国7都市を対象に調査を実施したんです。私の担当エリアは首都圏だったのですが、大変興味深い結果が見えてきました。それが、「方言コスプレ」について考えるきっかけになりました。

——どんな面白いことが分かったのですか？

田中 昔から「上方VS江戸」という構図があり、東京人は関西弁を、関西人は東京弁を敬遠していました。当時も、首都圏に住む50〜60歳代の人々は、関西弁を受け入れなかったのですが、何と40歳代を分水嶺に、30歳代、20歳代と若くなるにつれて、受け入れる人が増えていきました。



2012年2月、田中ゼミ卒業発表会で全員集合(写真提供:田中ゆかり氏)



——なぜ40歳代が分かれ目に？

田中 当時の40歳代といえば、1980年代の漫才ブームの洗礼を受けた世代なんですね。つまり、首都圏の若い世代にとつて関西弁とは、テレビで盛んに流れている「よしもと弁」で、流行りの一種「サムシングニュー（何か新しいもの）」として受け入れられたわけです。

——面白いですね。普通、方言という、人から人へ地理的に隣接した地域に広がっていくものですが、関西弁はテレビの影響で一気に広まったと。それで、関西弁に対するイメージが「楽しい」とか「面白い」に変わったということですね。

田中 そうなんです。例えば、自分を面白く見せたいときや、相手の冗談につっこむときにわざと関西弁を使うのは、そうしたイメージが定着してきたからなんです。

「方言コスプレ」は、ポジティブなコミュニケーションツール

田中 1970年代頃までは、標準語政策の影響で、「方言」は「好ましくないもの」「恥ずかしいもの」と位置付けられており、「方言コンプレックス」を生んだ時期もありました。ところが、90年代中頃から2000年代前半に、各地の伝統的な方言を「文化財」として保存する動きが出てきて、テレビドラマなどでも主人公が土地の方言を使うようになってきました。

それがきっかけで、方言は「味がある」「価値がある」といったイメージに変わっていったと思われまます。

——そういえば、主人公が土佐弁を話す「龍馬伝」は大変なブームでしたね。

田中 はい。若い世代は、そういった「方言」を取り入れて、親密な間柄やくだけた場面において、自分の気持ちを柔らかく伝える手段の一つとして使っているのです。

——そういうことだったんですか。「方言コスプレ」は、ポジティブなコミュニケーションツールとして使われ始めたということですね。

田中 それと、インターネットの発達によって、携帯メールやブログ、SNSがたくさん使われるようになったことも、「方言コスプレ」が加速度的に広まった理由の一つと考えられます。

「メディア」「若さ」「女性」が「方言コスプレ」のキーワード

——そういえば、携帯メールの「絵文字」や「デコメール」なども、まさにデジタル上でのコスプレといえるのでは？



2010年8月、山形県三川町でのフィールドワークの様子。町民との交流会も行った(写真提供:田中ゆかり氏)

田中 そうなんです。でも実は、この現象は昔からあったんですよ。

田中 以前から小・中学生の女子の間では、授業中にごっそり「回し手紙」をやるのが流行っていて、その手紙をいかにかわいく、カラフルに書くかを面白がっています。これも、ある種の「コスプレ」といえます。

——なるほど。「ことばのコスプレ」は昔からあったんですか。人つてみんな「コスプレ」が好きなんですか。

田中 そのようです。だから、「方言コスプレ」は今や当たり前に広く使われるようになってきたのでしょう。方言を、意味に促った漢字仮名混じり文に変換するソフトも出てきているほどなんです。



フィールドワークの調査本部はメモや書類がいっぱい(写真提供:田中ゆかり氏)

——そうなんですか。「方言コスプレ」はしっかり認知されたといえますね。

田中 私はネット上で使う言葉を「打ちことば」と呼んでいるのですが、「打ちことば」は相手の顔を見ずにやり取りできますから、「絵文字」も「デコメール」も恥ずかしくない。だから、年配の男性でも「自己装い表現」に抵抗を感じることなく、一般化が進んでいったのだと思います。

——「方言コスプレ」普及のキーワードは、「女性」「若さ」「メディア」といえそうですが、今では社会全般にその現象が広がっているということですね。

社会がことばをつくるのか、ことばが社会をつくるのか

——これまでの話を伺ってきて、「ことば」と「社会」には密接な関わりがあり、お互いに変化を遂げながら進化してきたことがよく分かりました。

田中 そうですね。社会がことばをつくるのか、ことばが社会をつくるのか。それは完全に循環しているといえます。

——「ことばの変化の中に、社会の変化を見る」と考えてみても、非常に面白いです。

田中 そう言っていただけるとう

れしいです。ときどき、「自分は何のために「ことば」の研究をしているのだろう」「何か人の役に立っているんだろうか」などと考えることがありますから(笑)。

今の社会をどう見るか。経済、政治などさまざまな観点からの見方があると思いますが、私は「ことばを「補助線」にして「社会を見ているのだ」と思っています。

——すてきな考えですね！「ことばの楽しさ」を追求されるこれからの研究も楽しみです。

本日はありがとうございました。

「こだわりアカデミー」書籍プレゼント

今月号の「こだわりアカデミー」にご登場の田中ゆかり氏の著書『方言コスプレ』の時代—二七関西弁から龍馬語まで(岩波書店)を、抽選で5名の方にプレゼントいたします。ご希望の方は、①氏名、②貴社名、③住所(送り先)、④電話番号、⑤書籍名、⑥本紙の簡単な感想をご記入の上、下記までご応募ください。

【宛先:「こだわりアカデミー」書籍プレゼント係】
 ■FAX: 03-3580-7610 ■Eメール: talk@athome.co.jp
 ※2012年9月18日(火)到着分まで有効とし、当選者の発表は賞品の発送をもって代えさせていただきます。応募者の個人情報は、抽選・商品の発送のみに利用します。